



2009年5月27日放送

漢方医人列伝「曲直瀬玄朔」

北里大学東洋医学総合研究所 史学研究部 教授 小曾戸 洋

曲直瀬道三は優れた門人四人を養子にとり、曲直瀬家を継がせました。曲直瀬家は代々江戸幕府の医官となり、医界に君臨しました。その学派を後世方派あるいは後世派と呼んでいます。

後世方派とは、中国の金元医学に基づく日本の医学流派をいいます。金元医学とは、金～元の時代に劉完素・張子和・李東垣・朱丹溪（これを金元四大家という）らが唱えた医学の総称で、従来ばらばらであった生理学・病理学・薬理学・治療学を、陰陽五行説・五運六気説のもとに理論統合を試みたものです。その理論は複雑で、思弁的色彩が濃厚ですが、道三は咀嚼・整理して弟子を啓蒙し、臨床応用に務めたのでした。

今回は道三の名を襲名した二代目道三、曲直瀬玄朔の名医ぶりを御紹介しましょう。

玄朔の名は正紹、号は東井。初代曲直瀬道三の妹の子で、天正九年（1581）、道三の孫娘を娶って曲直瀬家を継ぎ、江戸末期まで続いた御典医、今大路家の祖となりました。豊臣秀吉に使え、毛利輝元の治療を行いました。院号は延命院、のち延寿院と称し、後陽成天皇や徳川秀忠を診療しました。門下から岡本玄治・野間玄琢・山脇玄心・井上玄徹・井関玄悦・饗庭東庵・長沢道寿・奈須恒昌・古林見宜などの名医が輩出しました。

天正十一年（1583）正月二日、65歳の正親町天皇は突如、脳卒中で倒れ、周囲を

心配させましたが、侍医の一人、当時35歳の曲直瀬玄朔はみごとその治療に成功し、名声を不動のものとししました。玄朔はそのときのことを『医学天正記』に次のように記しています。

天皇は突然中風で倒れ、人事不省に陥り、ゼイゼイと痰まじりの声を発した。身は温かく、脈は浮いて緩やかである。侍医の竹田定加はこれを傷寒であるといい、侍医の半井通仙は中風といい、二人の診断は異なった。私は通仙と同じく中風と診断。まず通仙が御薬を差し上げたが、一日一夜まったく意識不明。そこで私が命を受けて御薬を差し上げたところ、翌日に意識が戻り、だんだんと食事も進むようになって回復した。私がまず差し上げたのは蘇合香円で、これを生姜の汁で溶解して服用。その後、小続命湯を二包服用して治癒に至った。

蘇合香円とは『和剂局方』を出典とし、蘇合香・薫陸香・青木香・白檀・丁香・沈香・安息香などの香薬を中心とする十五味から成る丸剤です。揮発性の芳香精油成分を多く含み、漢方では停滞した気を順らす、つまり気付け(覚醒)の作用があります。樟脳すなわちカンフルに類する成分も入っています。

ついで正親町天皇が服用した小続命湯は、中国の六朝時代(五世紀)から用いられる名処方です。出典によって若干の違いはありますが、麻黄・桂枝・人参・甘草・当帰・川芎・杏仁ほかを配合した煎じ薬です。続命湯とも呼ばれ、現代でも脳溢血による半身不随や言語障害によく用いられる処方です。しばしば卓効を奏することが知られています。

玄朔は天皇の病状をつぶさに観察し、自家薬籠、まさにオーダーメイドの処方を次々と繰り出し、効を得たのです。漢方薬は体質改善、緩和で副作用がなく、慢性病に徐々に効くものだというイメージがありますが、決してそうではありません。急性病に速効のある漢方薬はいくらでもあります。ましてや化学合成物質にまみれていない時代、しかも五感のすぐれた名医による治療は、より効果があったことでしょう。

宮中や将軍家では名医を集めて腕を競わせていました。当時玄朔は35歳。先輩の竹田定加や半井通仙は、天皇や将軍の治療に多くの実績を持っていました。こうしたライバルとの腕くらべによって玄朔は名医としての評価と地位を築いていったのです。玄朔はついに医師として最高位の法印の位を手に入れました。もう一例紹介しましょう。

天正十五年(1587)、豊臣秀吉は島津征討のため毛利輝元を九州に送りますが、輝元は小倉で病気に倒れました。秀吉は輝元の治療のため、曲直瀬玄朔を小倉に差し向けます。そのときのことを玄朔は次のように述べています。

春、私は秀吉公の命で小倉に行き、病の床に伏していた輝元公の治療にあたった。輝元公は下痢・下血が激しく、みぞおちに、しこりがあり、左の脚の脛が腫れ、くるぶしが痛んで歩けない。私は種々の薬を使って治療すること十数日にして、脚の痛みは半減し、秋にはすっかり治癒した。

輝元はこの九州平定の功により、秀吉や正親町天皇から数々の褒賞を賜っています。病に勝てなければ敵と戦うどころではありません。玄朔のような優れた従軍医がいてこそ、

輝元は戦功を得ることができました。優秀な医療スタッフを多く抱えていること。それは天下人たる条件の一つだったのです。

文禄元年（1592）、秀吉は中国を征服しようと自ら軍を率いて肥前国に赴き、玄朔も従いました。そこに先に朝鮮に進軍していた毛利輝元から病気の知らせが届きます。秀吉はそれを治療させるため、こんどは玄朔を朝鮮に送り、玄朔は朝鮮で医療活動を行いました。名医も武将と同様、命がけでした。

文禄四年（1595）、豊臣秀次は秀吉の怒りをかって切腹させられます。秀次の侍医であった玄朔はそのブレーンとみなされ、水戸の佐竹義宣に預けられました。出世と失脚とは紙一重の時代でした。しかし玄朔の技量はかけがえのないものでした。

慶長三年（1598）九月、後陽成天皇が眩暈で倒れ、人事不省。竹田定加ほか数名の御典医が治療しましたが、いっこうに効果なく、ついに危篤。朝廷は勅旨を発して玄朔の罪を許し、水戸から京都に呼び戻しました。玄朔は勝負にでました。玄朔は真珠丸・麝香丸・蘇合香円・安胃湯・大雷散などの秘方を次々とくり出し、ついに養胃湯をもって天皇を全快させ、病との戦いに勝利を得ました。喜んだ天皇は玄朔に、黄金の花瓶と、白銀一千両という破格の褒美を与えました。玄朔は50歳にして再び絶大な名声をほしいままにすることになったのです。

江戸幕府が開かれたのち、徳川家が玄朔を重用しないはずがありません。慶長十三年（1608）、徳川秀忠は治療のため玄朔を江戸に招き、邸宅を賜り、以後玄朔は一年ごとに江戸と京都に居住して、幕府と朝廷の医療を担当し、寛永八年（1631）、83歳の長寿を全うしました。東京渋谷区、広尾の祥雲寺には今なお立派なお墓が、多くの子孫や弟子たちの墓に囲まれ建っています。

玄朔の『医学天正記』には、正親町天皇・後陽成天皇・織田信長・豊臣秀吉・秀次・秀頼・徳川家康・秀忠・毛利輝元・蒲生氏郷・佐竹義宣・加藤清正・片桐且元ほか当時の有名人を診療したもようが詳しく記されています。